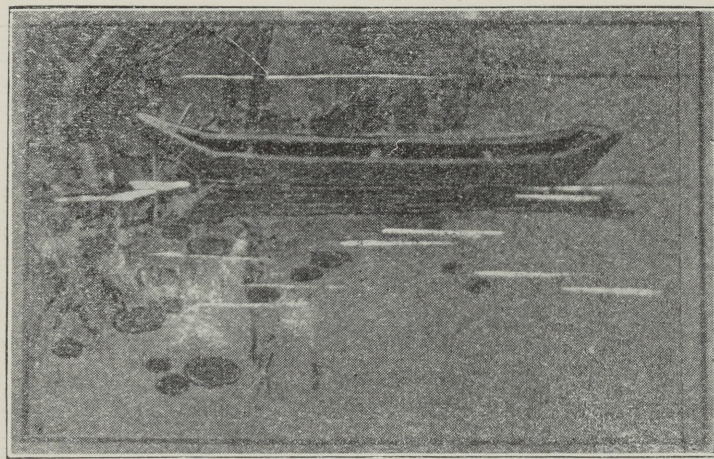


の上りに苦しむ甲斐あるべくも思はれざれば登山をやめつ、左なる濱の方さして進みぬ、伏姫君の八ッ房と共にありし有名な富山は道の傍にあり、樹木なく水涸れて趣きなし。

時は二時を過ぎぬ、道すがら茶店を見たれど、人多く居て麥飯の包開きがたく、三脚据えて食ふべきよき位置もなく、こゝ迄携えへしも、今は空腹に耐えて路傍に包みをと、きしが、人の来る氣配に驚ろかされて半にしてやめぬ。

今戸、竹内、市部の村々を過ぎて、加知山に着きしは夕暮に近き頃なり、町并揃ひてや、繁昌に、港は狭けれど、風景佳なり明日はそれを寫さんものをと思ひつ

、某屋とよべる三層樓の大なる旅店に宿かりぬ。導かれて表二階の座敷に通るに、障子は立付あしく上の方三寸も空きたり、黒く煤けし紙はいつの世に貼替へしか知られど破れたるを繕ひもせず、疊は隅々透きて表溜れ座するも快よから



(シツラグ) 筆 郎 次 藤 下 大

ず、こは見掛倒しよと悔めと今は詮なし。

食事も終りぬ、風呂はなしといふに早くより臥床に入る、臥具はと見れば、薄き事寄席の布團の如く短かき事嬰兒のその如き一枚敷きて、上にはこれに釣合よき搔卷一つかけたり、硬き木枕に頭いたく、旅は憂きものと思ひぬ。

階下はいと賑なり、客ありとは覺えぬに三味の音喧しく、都々逸端唄の怪しげなるを女中共の互に浮れ合ひて笑ひ興ぜり。

程過ぎて隣室の客歸り來りぬ、年若き男らしきがはや此家に久しく滞留せると覺しく女中共にも馴染あり、何事か心に憤るらしく、床を烈しく踏み、枕もて火鉢の縁を叩き、終には疊の間より湯を流せしと覺しく、下より女中の來りて苦情をいふて争ふも物騒がしく、吹入る風の戸障子を動かす音、火を警むる町の金棒の響など交々耳に入りて夢に入りがたし、(つゞく)

畫家の長壽

チシアン	九十九歳	シヨンベリニ	九十歳
ミケルアンゼロ	八十九歳	チントレット	八十二歳
ペルデノ	七十八歳	レオナルドダ ピンチ	六十七歳
ムリリヨ	六十四歳	ルーベンズ	六十三歳
レンブランド	六十三歳	ベラスケス	六十一歳
バニョールト	六十歳	エルバルト ドヨールト	五十七歳

(以下嗣出)